

「なくてはならぬ者」
コリントの信徒への手紙一 12章 12-26節

今日、私たちは世界聖餐日として、世界中の教会がキリストにあって一つであることを覚えます。しかし「一つになる」ことは簡単ではありません。私たちは性格も考え方も価値観も違い、その違いが比較や優劣、時には排除へとつながるからです。コリントの教会でも同じことが起きていました。そこでパウロは、「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っている」「目が手に向かって『お前は要らない』とは言えない」と語ります。キリストの体である教会には、いない人は一人もいないのです。

しかし私たちの社会には、人を「役に立つか、立たないか」という効率や成果の物差しで測りがちです。しかし、聖書は「弱く見える部分が、かえって必要なのです」と語ります。人の価値は、何ができるか、何の役に立つかによって決まるものではありません。

詩編 133 編は、「見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び」と歌います。神さまは、私たちが何をするか以前に、そこにいることを喜んでくださいます。私たち一人ひとは神さまによって造られ、愛され、かけがえのない者として生かされています。そこに、神さまに造られた者としての絶対的な価値があります。

だから教会とは、違いをなくして一つになる場所ではありません。違ったまま、キリストによって一つにされる場所です。一人が苦しめば皆が苦しみ、一人が喜べば皆が喜ぶ。そして、誰かが傷つく時、最も痛んでおられるのはキリスト御自身です。キリストの体には、十字架で流されたキリストの血、すなわち「あなたを失いたくない」という神の愛が流れています。

私たちは皆、弱さを持っています。しかし、その弱さを通して、自分一人では生きられないこと、人の支えを必要としていること、そして何より「私にはキリストが必要だ」ということを知らされます。教会とは、強い人が弱い人を助ける場所ではなく、弱さを抱えた私たち一人ひとりが、まずキリストに担われ、その恵みの中で共に生かされている場所なのです。

その恵みを、私たちは聖餐の食卓で受け取ります。一つになれない私たちを、主が一つの食卓へ招き、「あなたたちは一つの体なのだ」と養ってくださいます。そして世界の兄弟姉妹もまた、同じ一つの体に結ばれています。私たちは世界で苦しみや祈りの中にある兄弟姉妹の痛みを「自分には関係ない」と切り捨てることなく、共に祈り、痛みを分かち合っています。

教会には、いない人はいません。それは、何かができるからではありません。役に立つからでもありません。神さまが、その一人ひとりを造り、命を与え、愛しておられるからです。私もあなたも、そして隣にいるあの人も、神さまにとってかけがえのない一人であり、キリストの体にとって「なくてはならぬ者」なのです。